巻頭によせて

渡邊博之（農学研究科長）

令和６年度も終わりに近づき，１年の教育研究活動の振り返りをする時期となった．終わりの見えないロシア・ウクライナ戦争をはじめ，世界は不透明さを増している中，教育現場はようやく新型コロナ禍の大嵐を抜けて平静を取り戻しつつあるように感じる．農学部の実験実習授業や農学研究科の研究授業についても本来の授業スタイルに戻すことができた．そのような中，今年はChatGTPをはじめとする生成AI系の情報ツールがこれまで以上に教育現場を翻弄した．当然のように学生がこれらのツールを授業中に多用する状況で，教員もレポート評価の方法や，授業の目的や説明方法を考え直すきっかけとなった．また，こうした新しい情報技術を食料生産現場にどのように導入していくかも課題となった．

今年も農学部研究教育紀要が完成した．2016年９月に今の新しい形での農学部紀要が再刊され，９号目となる．執筆者はもとより，取りまとめの労を取っていただいた農学部先端食農学科佐々木慧先生をはじめ，編集委員の先生方に感謝申し上げる．

研究報告として，環境に配慮した新しい養液栽培システムとして「イチョウ剪定枝を用いたトマトの養液栽培に関する研究」および，植物の新しい学習ツールの開発事例として「玉川学内農場における救荒植物VR空間を用いた学習ツールの開発」の２報を掲載した．さらに調査報告として，カナダ・ナナイモキャンパス周辺の農畜産業に関して「カナダバンクーバー島ナナイモ周辺の農畜産業の現状」および，北海道弟子屈キャンパス周辺の魚類に関する調査結果について「屈斜路湖とその周辺の生物相調査報告2」の２報を掲載した．本学の学内農場や学外農場，学外施設を活用した研究報告となった．

さらに教育実践報告として「農業高校生と大学農学部生の進路意識に関する調査」，「農業高校と大学農学部との高大連携教育プログラムの実践と評価」，「コロナ禍での生産加工室の取組み」の３報，業務報告として「令和５年度農産研究センター業務報告」と「玉川大学農学部農産研究センター農場における気象観測結果（2024年）」の２報を掲載した．研究報告とともに教育活動に関わる報告が充実した内容となっている．今年度の玉川大学農学部，大学院農学研究科のあゆみの記録としてご一読いただければ幸甚である．

本紀要の完成間近の2025年１月29日，生産農学科准教授の奥崎文子先生が亡くなられた．亡くなられる１週間前までオンラインで学生指導をされていたと聞く．突然の訃報に驚きと深い悲しみを禁じ得ない．オープンキャンパスや収穫祭などの学内行事に常に協力的に対応され，いつも学生の立場に立っててていねいに教育活動にあたられていた先生だった．植物の遺伝子工学，分子育種など，農学の新しい分野を切り拓かれ，これら先端研究分野でも多大な貢献をされた．これまでの奥崎先生のご功績に敬意を表し，これからも先生のご遺志を引き継ぎたい．奥崎先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます．

2025年３月２日